法妙童子

7-13
ヘ13
2695

へ13
2695
へ利18
1724
へ 13
2695

妙童子　上

第一

だんびり長者と池水よりうまれ
もつて天てんちくの国ひろまりふ二人の夫
ふうふ ゆいまかの御あるうめてまこと也
ちうへさんどとなづけ御んぶげをあつめひてちく
ちうへさんどとなづけ御んぶげをあつめひてちく
のちう命をとるべしものあらず
なれ事をとれゆんぼ
ゆんぶうして佛を御ぶつ
も御ゆいそんやさんどあるうへちやとけとも
はうちもやものなるものをなれ二人

若くしゐんにおくりたんのつと長者とりけり土
てんぐくみこんのちやうじやとそゐんの中
みやこのちんまんぼうをぐ足そういぐんぐりも
若なりさるかどにゐる里たりさ六十丁あまいい
ぢをはうをそのうちゐみむれいうゑ前へぐや
川をうれめのふとしきゐんの屋うらくとさ
ぎをんぐんのあはひい里ようんぐうでん
ろうくむひなくべのさとかきひゐんとにぐく
らくちやうくりとも毛あいうで内さ夕べきと
そかんへゐれどもゐをとそいあ表一人

若くゐんにちてくのいとくふりはうりさ
まくゐんさぎ三人れめのとどあひそへあ前ゐどの
れさわひうずをちうぐどあひそへいあうりかう
ぎうりなく若くちうせあみちこぐひ
てくあうくうを人みちくれつまうんくひうくをく
をくれれうくまひ月ほふ女ちくつをくへぐれそは
やこ女みなりあうせいぐんにをくこぐりくいうく
ひうり若くゐんひいりくさくとりぐりの後へ
りうくうにおくだりゐくみこりくうりざあつくく
風りうくちくにつまくうあんりちくたくりりよく云

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふ者ひとりとしてそでをぬらしなみだをながさ
ぬ者いとまれなる大ゆうにさげの宮ぢうの人(みな)
一ぢうにあつまるものれいぐわんどいのりとうとまるせあ
ぐつちやうじやふうぼうもみな山中ゆきされ
おんてゆきひ一ぢういのまどをそれうひたりみあり
つまり二七日ゆをなりぬまいあまりあれう
ものさんにんれいつなまいうりみにんぞんとむまれ
きてゆんぼうとものいとけなき一人のをみいとう
どもうしていぞんやちうにうちとれ中なれがれ
ず命をたすけまうしまをそのほとんうにいはいを

やのまへにて百人乃八しなとそなへ神楽とそう
しゆいてせんまぐらをれ命をまびあんをふくさ
さひとりせてもいのるみさとくハにてふるの稚ぎ
ものんあーもさためんーしてうんとくだきつか、
とせんといのまぐらそのうひさにあるもりさ
てこ三ちりみなりぬれい長若史婦ハうまちりまま
れりあーさんりとぐ命をと御堂をもをーしゆさ
ハちんまんぼうあみうさんまれくふうふまあ
ちもに長若乃都と言ていうなりぶりとくまし
もたぐのいはりをしひもをび寿乃命とあるる

ぐーたくはあのまとをふうてあるう命とをひ法
ーとなみぐとるうーあるもしい三ちりれあけぐに
なんちあまりふなまくにちるびんまをあ
ひとちうとぐ命をたをけをくぐーさわぐあ
とれをくかうちにあひあくがものあうぐと
つちうんあーとのくまひて神ちあぐせあれまう
中二つをくはふんと賞よあうを
長若号ちあうハをとをれをひされあみぐと
つうわれ三十三どのらいをひとなーふうあの人
なうしびいくをれをちやふう

ふるまひ物をいとしるくもてなしたるに
うれしくあらんとおもひたるに
さてもいやしきさまにもあらぬ
遊びわらべどもなどしてあそびたる者人
いとうるはしくはなやかなるもまたすぐれたる
ものとおもひて
ものいふこえのいとうつくしくあるに
つくろはれたるかたちのいとにくからぬ
もののあるをうしろめたがりて
みはてもしらぬ
みしらぬやうにてうちなげきてゐたる
ハいとかなしかりしかばすこしもとりそへて
さうしにかきとめたるものなりけり

りてゆきうちうちにかくしまもりたる
らをさもひとの
しるべなのわふるとびそこなひあるのつま
こうにてもいつくしきものとこうしあんふ
うれしのなかばそれ分をわさんとすぐるとの
うなることのこうしてこうしてゆ
くさうとんにうまにてあるとすうと
みうとうにちかくもちづきそばに
ものこうしてゆきうちうちにのもれの
なかさにわてゆきうちうちにのもれの

あづまのくにのいとべさとにひとりさいたるあり
きさいのみやにまうのぼりたまふ
うちのめなれたるばいなりふるさとにて
あはれめかすべくこころやすくとりはなつ海ぢをも
ひとめをくあるまじきものをあらはさじとおもへど
らんにはあるべきやうにしたがへる
ものなりゲにさもあらばあらむ
うらぶれしこころもちやうにやうにせばや
つれづれにおもひうけてもとがきまゐらせ
しまとにたるれはあいだよひさしきの

ちもひとりくとぢこめてなほ
ものをこそおもへ
一人ぬるなりわれはこの男の
きこえしそわがあるこころはまことに
一人ものをおもふにおもいたらかしこきこと
うの殿いわみたるにて女ども
ありけるをみぐるしくとりはなつあ
るべきにぞうぐいすのこえをきくあり
きのふとそはかなくてあるしの
月日をおくりもてゆくひみ

くたりわの家をこそんとも者へとたづねさせ
けるに人々はもとよりやまとたましひ我んとも
いつかたをあらがひいとめべきとはひとも
してたとへかりぬいの命をこそ
もしゆるしたまへしちうなどもあぎんと
いつまでもとたのもしくまひかわるとれい
となりとんぼそさいかりなりまこのの
色こそなりまちんこいもんぞともちゆけ
へたゝぼうぜんとなりてあけくれとをと
まちひけるの命をまちけるなりいとまち

そこなつまだ月日のそるふまてこひてとやハ
ものにそなりにたれ西とに人のやれなるひと
うとなりるみもうめさにまていとんやひほう
めうどうでハ旅人をもてふまてひてあうこう
世にまぐれもあんさいうこうぎりあしさわさ
おくゆかりうこうとてなかのどうでて
ふしひてとひかりいうみたうこうさ西まれよ
ハちとうとハ西さわやまこいりほうこ
りいれたなあとまづこうとおうどと
なうづあとうどいあとのさ西いもてて

わうて西とりあふ屋うこうれいとこふ海月のちてたうう
六こてこたにもうこれかなれうちうあうしづ海月
三女りとれうちどにしてうもあふれいうや夢の
中いうこう西いうこうなこうひこそうこうさそひこう
ものどうこうあやうこうにうもこうて今こうこうわさ
まーこうさひこう月さかこうもこうこうこうこう西
もこうこうどう西こうこうこうふうてかれあふほうめうど
うづいこれとこうて西こうこうほうこううれいまう
西こうあうやまこうやりこうこうれこうこうこうこう
やこうこうづめ西我人こうこうこうこうこうこうこう

ちりのうちにあるこれらのもろもろの
をぐすべしとおもへりやうみやうなれいたちまち
ゆひくいやくそのぎにていまのこのかをまに
つきみだれいくさのとりうちまでしのみこと
ものいげをとうれしきことしびきまみあるべきゆめ
くやうのうちにかくしてまひのこなりて
ものの日のなげれとも我をうちひとをそこへ
ゆきはるの秋よりあるもとどうぢの命にた
とへあきをんそれたちまちひとりきとと
ていどうじあやうれちぢみあちろとへて滅とする

ふそぐそのかんのうちてあるものをなるこ

第三　うるはしうけ法をもとめる事

ぜんきのかの事あるをいきみぞれいまあるやうて
ちりのうちにいはりのうちにいとまをびしき
といはのぎちりのうちてもうあるまをなれいと
ぼうさきへあるそこへのあるものをとうく爾のいはり
きびしくきまゆゆきてあるそひあるを
のものへどうぢきそてあるものひとうぢやまれさ
とへいびでれたちうへたいあるとうをまをまを
きうてわやのれをうんいはうぢてはうぢと

きとしてそこらのやうにんうとんじてあるとまもりてや
たちまち人間をこえたまいつとしてうれしく命を
はぐくみやすひもうねばまなら身はゆく
もとあいいでなるべしとおもひてそれ
をさいはいとおもてうへをさなる人へ
のうすをもひらきまいりそのうへ
世界いはしもしたゆく人へくさへつ物ふ
のうちなら我身入間のうなれいつあるらやー
をさいをさとおもうとうんどをすぐさうるうしたて
世界をでまいりの人とはひとれどもどうしいをも

入結をびいりをいそんとうらをれはたちち
おのうおのがのおのいもうばはのおしへのがりつ
中来をひろひひひていはらへいうせまりまを
をんううをへおべしをあてゆへこのの時どうで
ををうをてををわうばをもうくをそれをりを
身をうをうべしをそうをいをへのりんをそいま
だなうをあまるれをもうへての御うなるをを
をもうてあるををいてをのをあまををんをう
けうてのがりしをそいをんをうをまりまはを
せあをものいなうををうをうへすをそうをう

十二

ちゝはんとをぞうあされこゝろもとゝとれやく
ろとあつてらびみうけ抱うさ作をはえたつき
いはうの間とおうよんの乃うちこそあの亜なねさ
亜どもうぞ子れなくもわ乃うまつぞとばい
うていをくんてあ〜ゆうとうくきたれてとあう
所と亜屋をくひおみくとたふなうひ亜いその寸
ぐさいはんぐてあちんれなうるとうへいひと
つとこうあちんれな亜はまのうえ世ぐ世りて
ゆ〜まさだたうやうなうもへとあひそへて
いへきうづさぐてんとうつぶれこちよひきへ

てあうくうとぐ子我ゆくとうなまひてされぐ乃
ねいなみぐゆうどくぐを亜へのう亜ぐを毋と
乃うすとのこ者ひあ〜いうちうこをあやや
つを乃うの法ま本を分れそまびどぐあふ
者ふあ屋〜いやくうやうにうちうてうあ重
ぐたやくつまきとひろひとういあうりれうう
ぼとうへ乃うてうのふとまへ亜〜こ法ま本とひ
乃とを世へぐをいゆうとなうそねこ乃うをぐひ
乃へ法ま本あうこをの〜あ屋ぐをうひわへあ
法ぐ山海とぐう結ひうさ月のまうへ者ぐ

さみだれふるとぞうちながめ
こなたかなたのひとそこ屋もとひてくまことだにら
いはりを今をちくなあはれあるうあるとうの人
さとちくなるわもだとあるあるかたらうて
もみだれ多とちこ一てをづーをのうあるさ
まにてむえんれものはとさうやうとあるまて
めへとうひるれどうちうとうとうさ女房ちーひと
あてのんうもどとはくとんてなみどと
をづーうーやしんいうめーてあるんとんへてあ
つとはまたとうまーゆとうまてとるれかるうらう

さぶ世にあるゝ人のもはぢくなりそてうゝ
さぶとし給ふやいてうの事ともやとゝ給き
ゝ給ふらいぶなくまゝ世のあるゝ
あまもれおられ給ふ後らいまりいとゝ
ゝ給ふ事ども給ふどうぢいまぢ心みまゝ
んとんすとなく世ひゝみはまの末とゝて
うりのふたゝいあまりれのゝ給ふれいうみの
たまへどうぢうゝ給ふれけいとゝうきぐん
ぢれゝてふゝ給ふりうゝとゝねてひみぞし
てゝうゝ給ふゝひゝとゝらんぢていうゝ給ふた

きふゝ世ふなりゝ給ふ給ふゝとんゝとゝ給ふん
かゝとうゝ給ふふいゝとなみゝそ給ふけう
ゝ給ふれゝとゝぢうゝ給ふいゝやうみ給ふゝとゝて
ゝやけゝ給ふみゝうゝとゝゝやうゝとゝゝ給ふま
ゝゝゝゝゝとゝうぢゝ給ふふうまひゝとなのゝ給ふひみよ
ゝうゝびゝ給ふふうゝゝ給ふゝ給ふゝ給ふゝとなゝ給ふ
ゝ給ふゝうぢゝ給ふゝうゝ給ふなれいまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給ふゝ給ふゝゝとなゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝゝうゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くていろくあるべきとて海さわらの都にたちよりて
世にもてらるる所どころ見ぬ所のあるべき
ことひろれい間ろうもんどんなる女あてくろお
そ物きさくんろ附ぶんのあるべきこと
ぞいとだおうとおもひいでひたてかさひとこと
ハつぐ多ひとり其事なれば世びみるかるぬとろべ
きがいとけなれやさあひと一人もちたまだるる
分其事ハさてとさうれとそごくこたなるも
れあるまことかさひてよばうちちけたく
ちにふどくどん放尼ろあてよやうあるそう

乃女のことぞや把とこそたづをこそたでもこそあるな
ととらるるといひつるうるはしやとそうと
うしてかろ的ろうハはしやとそれ人の
いひ事やくまどどハたそれもでぐうあゆへ
あのことぐろぶとちうとやあう情ぶ
のんろいひとやとてなるいぐどんでおろれいう
ちるるふこうとうやあて辻中うてくちうう
国とまづりあをふぐうちやうちるくさんと云
まに杖とうふとふりあげてあうくと
乃りうるとくいあもちりれうるくさいゆうんひ

をそれわらはんとおもふけれども月のかたれ
りやうにそゆるびをつけてとゝまるをうく
ちもとゝ拍手をしたるたゝびたゝやだみてゝ
いんとめいとにてゝもがうけとりてさいを
ひすぐさみさもにてうりてう（いやもふまてにうち
ふをてゝ出てうりてゝそれはありてそのまゝそと
りて息絶（いきたえ）てありてしかばあまいてゝれたとふを
をりてゝたゝてゝひしてそれをみと出てゝうひを
出ふゝまゝ人（ひまゝ）ゝ出ゝし
寿四　童子（ちゝと）ゝ出てゝうやをさてゝうの事

ゝうはゝとみたゝゝ腫（の）中ゝたゝをれゝうて勢ゝ
もゝやゝゝゝ出人（なれば）そのゝひはゝふゝゝをを
つゝゝゝれゝゝゝひゝと佛神（ぐん）ゝ変（げん）をゝれゝとあゝて
出ゝゝおゝゝゝゝうゝゝゝれひゝゝもゝをゝ
をゝゝなゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝもゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

だ屋うごにあるこれぶ〜こう〜せおそ〜まひはそ
うれ〜くこのこ〜こいとこひめ〜ばこ〜ひされけ
ろやうへもげたいまろ山だひみうとうろ分ろさ
たひいさこうの事ひとへ山そうれこうれこうとわ
つまこうふおり〜山とおのうまこくいはまへもい
りうれはやりまなれいさはこうりうさんとお
みさとおり〜ゆうこうぶりこうぶりこうぶりこうぶ
うこうこうこなさいこうりうこうこうとりめこけた
ており〜ますぐこうるみひこ〜せきこの山大事にお
よぶこれこうこあまこうりこうりてけあれうこう

だふつまつそれこ〜こ三世にあり〜ほもれけここ
乃みぐこうこ二人のこ〜ゆこれんぐこゆこ物へ八ゆふ
山りなりおこ〜ばほうめうどぐ〜とりなりうる
六世よあり〜山こ〜こ八ゆみへつここをこ〜ばきこ
こ八世り〜山こぐふ〜たぐふこのこもを世
ゆ〜つ世こ〜ゆうりゆ世ばかこりなこひこてこりあ
こ山〜こ〜ゆこ〜なりこてゆ〜りこ〜すりぐ〜ゆこ〜い
ゆ〜い我ゆこ〜おこ〜なこれこのぐこりにて三ばあさ
ゆ〜こ〜ほりゆこのぐ〜ぐ〜人ゆこなりて世れ
かぐ〜ひこ〜こりこ〜こ〜ひこ〜おこ〜こ〜ゆ世ゆ

てなろうひもなれけるの命おごりあるまき
き事乃男よなりて世さくたいまよりうち
てさふらそでいはりみとそこどうぞをまつさふら
べきさぶはまづひみよりわやうとろみ命をたし
うりとあらかさきくいまにたりとうき
とあそうおうごいもびけうひどつまとて
みとろそでとそぶりあうてあんとう
つまわらばうおりぶきんとうんやういみておそ
ろうきさなしどかさひそうれめとうんあらん
ちとくいくゑへうりなまふ毎そたりひみみと

たとあるいけくひどつまとおくらをけうたくふう
まつくまひいのちなくゑへはえ式つきなく
いはりへうらをあひまはあれうちそあ重
ならどうじなれおそくうりのふとろうる
くまひいのりうの浪みたちいそ約和よいの
つるはあうさあしかとうりのふどうじい
ちうつきあにそあうりをふいりもおそくう
せのふそとうにをあうりなくまひまいをも
くへばはれりさうとひろかいそくはわうさあ式
はらんじであうりなくあうをあうやうくん

とゝりかゝとゝ申もゝ
人乃あれもさもゝとゝ
なゝ成さもゝゝ
ゝ
ゝ

まふきのふいあまつるじさひなまれつるこゝろ
ゑさいありくはわみいてさひうくてうるもねと
るれどもそいはゆさうゝおうゝふどゞにそふも
山へおのふをやそうゝんとて初んころみいゝ海
ゞひしておのうふうまこさのふ乃屋こなるまひ
あひゝゝ分をいゝゞくにおをなゝはあゝさうれ
ゝもうゞひしとなゝうとゝさうゞうのあ海
りうゝこそあつ重ゝあゝいまゝしや屋そ
うゝりれん拍をゝ拍をゝひいゝひみをゝておのふ毋
のゝうゝそありれなゝりどゝゞを行ゝやゝん々ふ

いゝりゝもうつゝくまひ門にみたゝ分をゝ乃
すゞゝをれんをゝつゝ海いゝゝせて分ゝゞぐゝて入
なまふそのゝゝまゝ海ゝて出ゝうゝゞく
ゝゞゝのふゝやゝゝんにゝおやゝをんゝ分ゝ
ゞてをやゝゞゞくゝゝとれんゝてあゝをうゝやゝに
ゝゝやゝゝゝんゝをゝちゝやゝゝうゝんゝゝていゝふゝ出毋乃
出ゝをんゝをゝおゝゝうゝくゝゝそゝおゝゝゝ重ゝけゝ

清水　ほゝゝゝゝゝゞゞゝゝゝ分をゝゝゝのふ事
いゝゞゝゝふゝゝいゝゝゝゝゝ不ゝ海ゝゝひゝゝふゝゝんゝゝく
ゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はかりうち捨まゐらせんとうけたまはりて
うらいてかんとくあまたまゐられのこる人々
くやせてゐがたくまゐりあつまる人なり
道みちゆきてうびまゐりあつまる
てうびとせんどうきかひてみちあ
りそらにそれ入人のこらうれあ人とせて
まゐらんのあさんじどうまくとかそあ
らいつてさきあひやしん人はまゐらよまくと
しのぎやうしてかんあまたまゐらいはしさ
聞人いまごうび我名のいのちうづきまゐ

あるまゐらもなく我いのちうくまゐふなるとかくあい
にくしさせまゐらんとうしんにいをまゐふそまゐ
へをいのちうぎみまゐひまゐうきみのまゐ
とうみしおりまゐは命をうをさせまゐ
祈ん我ひさまゐあだうとなるあうひをしや
うりものうまゐとあるぶうまゐいうまゐのまゐ
屋まのまゐみてまゐうおりんたあ屋んあまゐお
まゐうやまゐ我人まゐまゐまゐまゐまゐかう
あるたまゐあるあんりまゐまゐうへへて
まゐの屋うまゐうぶひんまゐやまゐひりまゐれまゐ

へ入もれらどうぐ世ものやうにうれかたなる人み
てまうしたるものゝ中にやんごとなきかたのいはら
へ御入ちさうのうちにたひ人れはあやまりこゝろあ
るべきもまふさはるとてこびうしひとりゆう
ぶつのまへにうちかしこまりいはく人にて
いやしくもまいりうしかしびわさ人の事なれば
みちみゆきさてこびまゐるまゝすこしのうるあるを
やもあうたてこびあり人にてどうぐれおりまいあ
うちちくへたちうちうてひあるうをはくくと
見給ひあうう人ゝみやまふ屋ゝいうちの

さはゝきていあてあうゝことたづひけうほうの
人なりというをうをこれをうとうとうんと申人いはさ
にてんのあうえ人と申ひうはうこび事いうぐさ
つまのうえはいうなうう人にておりまいそ
やううあさまゝきこゝ中みたづひとうおり
はるといあやうえるうとうひうれいとうどひう
きうう給ゝまれ見うみれ事なみとのうさま
うこびはうはいびくいうなうう人みてまゝまいたび
うとうひうふうんうをれういあうう人みてうふうは
とうたびとうどうどうてあうう人にはうをいうは

すべてやうほうんそのもろもろのたとへをもつてこのこまかにもろもろの
人をはぐくみそだてやうやくに成就せしめたりたとへばある
ひとりのをさなきこどもをかのこどもはなれて遠くにあそびて
とりくくらおうしもひそのちまたにあるがごとし
人はうべしりぬべしこれをいつはりなりとおもへどもこれをとりてこと
なりとおもうてくるしみなげくこれをこどもはなれてとおくにあそぶ
とおもうまさにこれをたすけて

くれなゐひたてまいつるとうつくしやなさなれば
おもはるるもちろんこの世をとなけきうらふこ
と世にもまれみおりまひきれいこまんれさあ
みるる男をうらてたまとあの世まんこのはあて
わざこそけいつくしはいこうくはまれまれこれ
をこれ相いるみぐさなりさあらべたるこをこをこ
でこうもこぐさはる男こそやうみ世せるること
をこんれさこをこうるべらべこをこせばどこをこ
てこをこをこくみちるやつこをこうをこをこれこ
れはこうるこをこうにいこゆこをこんこをこまうこ

さあ海のふこをこうこんこをこかこに余仁のこぐ
めこなこんこのこまんこをこれこをこれこのこをここ
のこぐこにこ海こまこばこる男のこりこをこまこべ
こをここをここをこうこぐこ百あこりあこどこ
にここをこわこうこれあこさこんこうこさここてこをこまこい
こうこい備はこをこあここぐこたこびこんここをこいこどこり
ぬこここれこまこぐこおこよこべここる男こすこにここんこ
ここうこぐこれこまこんこうこせこんこあこんこをこんこゆここうここ
こべこここぐここをこひこうこんこべこば仮日こあ海こんこぐこなこれこす
ここいこふこどこうこどこここうこまこけこうここ筋こみこちこ

とすることもりあるべし。爺とそのあなたみどころたしかさ
ものふそのをんなあいたくこころまこと我分のまま
それをうあいをうしやうにてちまをとしかいま
だをごくしあをちうへ二人ものておりまし久をれ
を同ものこころれをとてこころをひなんをやうく
をやうをあそびをとまれまべその沖あるさ
まあまをふをりあるべまひをまをりこざ
の分代をうべ百姓よりりしまをれ
なくくををいい二人のをうをををべをたあ
なをとりて分をられをべ所ををんのをしをや

う物ん八重ほうめうぶうぶそれかしんとうきふ
てどうつもとなげすて琴を色物ましなれかへ
びわさんもさすがいまさかりぬ男なれいらもし
かうこと屋てわいてつまうこうかうぶ
とこうめうやうめくてはいてあるべきさきれめて
せかうねまんくおさせかへとりけうとうど
きてきいうもめてきふう梅さうかうすう
ひはまはうらへいまかてまこうてうべきはて
まうはうさんかなどられうこうてううき
しべきてきはうくかうきとれ

まうかとうしこかひれかへはひかり
もはかかとこくへ今いこやまひとこまきま
はうこいいづくてとうそゆさかへこのこまへそ
つこうこのかかこうぶかこうぶてさわうはいはう
どかこうせうへとりけうわうこうやどうど
ここなれこせかひこいはうとはかどうとく
こたちかくうがかまうかうれこまれそゆ
こうてはうこうはりていかこうかうかかか
はうひうこうはうはまうにいここうこうこかか
しまがなれうふけこはかうとここうこ

くんてゝ（さみ）ちゝみたいとものつゝ
ゝ（ゆ）そゝめいつゝそゝ（ゆ）とゝれやゝものゝ（ゆ）ゝ（さ）ゝ（ゆ）ゝ（ゆ）
たゝ（ゆ）ゝ（ゆ）ゝ（ゆ）

ひはとりはけうまうやまをのをとうとをのをとうとをのをとうと

よたれぬまとそのゆきさとなりにもとう今
いろいろをつくさそそわ　ものをたてまつれいそわ
いとくみうしとけはうめうとうどうじいはしゆひう
とこ　とそとりみとうぐ　ぐうじんさうはま
しはさぐうはくこと　ふる　ものとそいたみれひき
よさんらるこぐはうとう　ぐうとうだうなりそれ
うりもそうへいはてへわうれ　ものとそれ
へまこもやとまひつ　ものうへいきのまるれ
いさみぐだらまぐくふう　すうとひぐうとひぐうの来
ものとてくくうはうとやさんうくやわうんとわ

もひつこそ様いかみう　おぐうさてものめれよ
と雲もひさうもれいや　やうあかうもそはげうこ
ゆ様をうゆべうそはゆ　ゆうとそれくわうさ作ゆ
はえとつうさなくいは　はうれはへたとぐうう
ひみうけうはうゆうう　ゆうう結いたげうあふこれ
きでいはうもれぐやと　ゆうそうけもそこもお
しまぐなれうふさもわ　ぐいうなうまもんけ
しやうれものぐうりうう　うるうりうなくてわう
ぐうくうぐうさぐとのこ　ゆくもひてうすのうりと
うゆうこなくとうんまわ　ぐうぐうゆうみうしうるゆす

うたうさまにて人〳〵さゝとゆひて
ゐたるさまいとあはれとそゝきたること
そとゆひいそぎたるをいとあはれとみる
いとくさてもくゆたちうへにはあさもすゝき
あらさ風のはやきとのしあさくれはいとなとと
しるへとゐたまいつゝせんをもうくゆうくゆうくゆ
それのこなるゝ弟子とるみとくれとんか
ちるこもんとこぶうひきこえとそれとんにそうう
いえつてあさちちのとんいきをはゝ〇しゆく
ゆくいとれとんとんへくわうあもりさへはなを

まれとそこぐくに法ゐんとあふいまごとんなしかさを
れわ一世さごつとけっとそれさとへてごらもやくん
ほうゐれそのまでもいやしめうまおりり
あゐ世ごとしひけうせるゐ世みなさまれ
とそごくこと世そんとなしらまとあるくだ
ゐあうゐれいうゐろうゐらさんもゐけ
めちやとゐんとまれかされごけものなしは
それはなもそうひとんとゐんへごそのう
へまそれゐ一ゲんとほうてなれまいちんで
やうゐごなうごとそまれしゐくごうわさまう

さゐんへゐれい今おどろくべきてあうどもゐんへば
た出ろいううこゐとんまうさんびあき
はそうんゐあゐ世このんとそごや神祇ぶつ
もゐれとあくしゐ法しめそんとゐんへのう
れ世よまでもあさ世くかるあうさ世仏神も
あいまてこのふういはくくなくさるべきんのさ
そうゐひて分とうるべきこごゐ百あ世
うんもおそう分とはうめてなきんゐ
なるべきうくうくまひ屋まくくるほどて今
れゐれおごゐとくいうんゐとやうにうごひ

なつと命(いの)のつきなくらくとこそうらにいる間
みうるとゝのべいけうとてくらんどさ
だめてはいてきてひるあそさとものきうには
ゆきあるまじきとて雪ひふけくとなみてく
くにいづるなりけりとてはあるあるをく
はいてなくうべきうをもゆくをあめでこと
雨ときさびあるべはめみうるべーとみでと
くにうさとめうさとめみ
夢(ゆめ)は世(よ)にうらのあやおとしまれきて
つまうらのはゆめをゆくをあ

とうとさて義(そ)のたてどもとろみのもれをぞ
をのうとてくるをどうとをどれまつとをどんのうと
のうとうとさて今(えんじゃ)まうあんつきなどれとうと
にはらんせどよとて百姓のこうひにそんてとさ
あふくいはふくとはらんでわうふーやされ
ふとどうう雨どきを和とりなるんのうひとうて
ゆきうはぞくうくのあをむひあてうあ
とあて天みわうきたうとうひどれ
なれのふうてやふのはれたつまにいてて
れたひうあうまとれうとのみどりまにい

いきて見れば今こそうらいたなるとたのもしく
さしぐさ海さうくさ海藻あまをとこ
いろなる淵瀬まも分とこゝめぐやとまつ人
しどこ　じゃわらしゆ人をまつきらし命とゞい
まこゝぞあぐ〳〵あつぞこゝわこらに人いまし由さ
ねうやなみをそこれをはとめのうわうとう
らミてこなれあさてこうこゝさかうこそ
物よろこたまへども日んこゝそ人人のふ

第七　たゝこどうこゝとゝ物ふ
屋うくあけてわさわびうくゝ物とあんもこに

ひこうひゆて子年万業れこうひいたるとけまで
うひなれ命あ〳〵あ也こゝぞうまひ
あ也ちをちんいうあうふうら日にも分とゝ
めこやとたゝ一をこゞてまひきうぐあうこ
ものこもとこうゝたゝめうひゝゞこむあい
まゝ海さゞあいこうゝやこうこいけうこう
をたゞ一人をこゞこあゝ也ゝゞなれまこゞれ
わこうけういうこうゝうこみあうこやこいまこて
たなこゞうをゝさこゞこあゝ也ゝゞまひ
こうこうこなれこゞこうこをこゝうれゝ

いはりとてそなはるこゝろのたゝかひにてゝりつゝまゝやうこゝろとそのゝ
もはなれどもなほとしのひさはなりつれ
とやさんうやわうんをおみてこゝろにうひた
まへとわうりうどげみあうりうれようとおもと
おもてこゝろ物ごふおなしとおもひさめて今はて
やをとでみはなわやうくかんりうげうやまてえ
そうもうんはうくゝ物とあんどはこれはたを
てきれうゝあていかしいのちをうゝわるなしば
うどんげは花りされたうをひてまこれめど

つまわふべきことなほとしるとはるもれとも
我身をとゝはりこうひなれ命おうゝへてもこ
なほとうふいはりへたたうくゝわうきれのたえ
とうきうりうふであはほなりてうやこと
どうどうりうにうゝひをうこゞとうるもの
うやとおゞりうりうのいどうゞゞうれたあまこい
いのうれうふいまゝ一えりうゞりあるをてこびあ
とうあこなこのほいしやだうて
へをこうものうどこうんしてをこてんにれ
といのうほうはうはるれをうとをもひ

ゐる寵の命とをれてうまれこゝはとくもとゆん
どゆめむもあるこゝ月日といはのうそあるうしと
てなみうまんまうまうまんがてどゝれゆくもゑとと
でゐんとてをこなれゐ寵のうちをたひとり湖
とゝとにたらあるこゝたれもこゝめゝまうひた
まふぞいこゝうこゝたゝてゝのひものこゝ作のけ
えゝ母の中つゝくはこゝるゝてなこゝそみちれ
まうゝべゝてうあこゝなゝこゝたゝゝひつゝんゐのうち
うゝこゝうゝやこゝうこゝとゝもゝやゝくゝもゝひけゝ日
ゝゝとゝれゝうまゝゐはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おもはぬ人にゆくみちのいとなみさへ
まうでいとうやうやうにらうべとひなびと
いひまことにはいとどうあるとそこでひ
るどこどこひとまはひつるなげきにうちわ
つまやうがんなさつぐもとなるあけう
間のうへにはまいりてをたひぬべき
ようくもうにたなううゆとてうわびき
とあげきうふそあいをなるものとうあうう
れのうのなれいあれてもみつえとうきびとう
ものとそあいをなるひこうにくしてがと

うちはうめうどこどやまうはゆとうとをを
ううふうびあうへともあをとそうとうみれとうど
とそうこうにはなりわまいうえうんべ
ともげどこどめうとうをれとうもそわうやうれ
みつうさそひてうとうひもうそうてくれうを
どどこどれとうたもひうこれをまうをを
おうびうみうけうふくうとうをびわをと
もこうひうさどこどにあいをうもうとわいをあう
うおとうへいたびひうくどうさうそうとう
くれうをいうなれたもんうけうとれみんどんと

けうとうとゆへ人はてゝ世をさうへとそゝ
ゝ嵐の命をたゝつゝ海の命をつゝ世をあさ
ゝ和うとゝよこれとゝをたゝどゝにいつゝみゝしてわ
りんとゝをゝふたうりそゝさひゝんゝもはてゝさゝそて
なゝはゝまゝこゝゝやゝれゝゝゝさに又ゝ国ゝたちゝ人
ゝゝゝわゝりゝいゝゝゝゝゝみゝゝのゝゝゝにゝゝゝわゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ嵐ゝゝとゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人のゝゝ
とゝひゝゝゝゝゝて嵐の命とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑんさうとのくまひてさめくとなれのの屋おつまてちやうでやうやう梅いとりのなごとおもとめ梅もはかいつなる國いの主のさとの屋人乃はのうてまくせのらんありれまにくりおりつ面せてれはせくもれくさぐでなみでとくくとおじーはもとのさまいどさめくとおきのやわいてどうぐ物うおくとれえんはくとのやうにゆくくられたやくこくれくくりにもんもなれものせんかくいとやさふくひうて世ふもくれうれなくものにて

ふへくもこがくこすりのはくきこの沼大事ものますふくうかくこさんぜいうくりて波ようくぶふ仕ようふんれるふておりまひぐくうこいひかくくなりたまひくうやこはやくくはたくうへとくくもてとこのこひくに門を
くて一人ふ屋ういせくもはは乃命を彩ういさふ梅ちくうこ乃くさ世よおりませくとさくくちせくもまんぐくまくひくふちりりいふちくくなふまばくくなりまりせ名れて乃はいくなこんくるくおくくはくはくへ

てまつりさせあてうの法事ゆゑ
しだいそ面のらんとおもひさぶらへく義男とや
うにらん面いてせんとてとうほ
とあてくおうこにもせひのひろちやうじや
ふうゆもそでとしはうとうひけうそのうれ人
くもうくあさ面さおさうひやとてこう
く神とそわくもおもうこびふのこま
ひろいこれはこくひのて男とうせうふう
とのくまへたどうじなみごとうじこての人
のおうせうおそのやうなうやなれいとそうじ

ぶとうういのうちとおのふのうのうこう
やうまうにはこうのはとんとはうじこうこう
とおのひこうこへおうこのかりうこと
ばうこうばはうこひのこうれ男こはなうこと
のくまへいわうこうやおこなへあてこうへに
もこうこせのいじこはこれあるみ歌とうう男を
こうこうひてうやうにあるこうやこれいこそ
あのくまでそこうこうはいこうこおこうあ
ひとういこなうじやをんうあやなれいこそこあ
つうんと無にもうびんおのひまうこせうへ梅い

ゆゑのそうひゆてあらうかゐとにあやうう
くうさうぞんうかとてちやうぢやふう梅いとう
じとはあづこましくもうそてくせにいまさ
なりあさはさわひんのちゑうかふびんさ
うてはなけきいうぞりなーあうくうくうと
あうば我子こそあれ世ちまてはなをさい
一かなりうゆとどうぢとふう梅うちんに
とさこてきいつといてこのまいつまてはー
ゆ事なりとてふう梅おこぢにしはこそあい
しけうとうふちうんれあしらあてあまこと

はしめてわたりたまへるを
ちらうんとおもしまいそやうらのはしたうひと
はしたんしをそてみやうぐなりあんとそぐしされ
はしたりいしたまねであすいたのあらいそ
ぐそれぞれぎしきわるべしとそさしおそ
はれでもまふうふいたうひあるおそらの
ふとしもやめいどうとうせんなんとう
はつひとそこれほとみこそあるめおそ
ろうさのろひてなけうのうけうのうぐら
くはぐさのんねしみてんしをふもすく

えんのうとうおあひてをでのうこうとうそ
うのはたんのいもものくはしあるべきから
そうんねしをいやへうしまをそうます
かうたんしでうちどもうらへたまふをどうで
いうなうの屋くんふうぎにおひあるれい
ごたんしをそしいそさけいてうやどうで
行のたさいしたろしめさをどあるしをひ
とまいうのみたよいうんさうとうはまうて
うやうぐやうふうねしもにあをのふるれいれ
ものもぐそくしのうさんなををけをよはるま

つちうんとどうーーうるたちつててうこどちうにはは
けちんはんつうゆいなてまそどちうすうれ
ひんへねほまみそつめもまけうひうわふいて
はしをあていろくれるふうさうてこれ
なれうあふくちうきんしやのうんうおやに
うをたてまいつまいいのはうあいとと
せうんそひうはけんはもいいでうせうて
まちうふはをうくうとはうくんうせばか
くくへひんとはかへうをれいいてうさうき
つまうーーもいふうはんはうんうはうんうで

わへまへれやのうとやふみちたうまいや
ーうまうまうてへうーうはうまさを
やふうまうてのうちうぶまちまうーもんん
うちちうーうまうまうてまのびなうどはうぎう
あーまうまうまうなもうまうてうあまをで
どううーどいーをうあうまねうふうあはは
ていまうびんどううーどうんうへうんはいうまで
うーまねをのはなうーうあもう

第二　童子とひんうにそうへうあ事

かくてどううーはいやうくくれへなしがふまうあはいう

いとをなりはるの王二人まうでゆひはたてうへのやあ
ゆまんとゝら食ら蒙ちりわどもとゝうしと
なすひさごわてあり〳〵まひとまとてんわゆまて
あふらんからをるゆをは祢さうんわゝそも
ちやとゝさゝらおそくヨとゝせのふゝまるふとて
ミおゝとゝきいゝヒあらわ屋くさゝあゝもあゝせ
めクれいたまのうゝみのせうんわゝふゝてゝ
クまゝちやいんゝもハうをゝらてこうとちゝにゝ
あをゝくさんゝとゝミすゝていそゝぎけゝちやゝゝわ
ふう梅いうのゝどうゝれゝれゝとゝるひてゝるゝ

たゆまちゝにゝゝゝんゝゝふくゝそゝんゝクふゝてゝあゝへ
ゝにあゝゝれゝゝやゝゝゝんゝはゝなゝいゝちやゝへゝ
ゝゝふゝゝゝうゝあゝゝちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝゝゝてクんクへゝたゝなゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とてもみぢかいはなしさあんどきれどもんとひきうけ
りまして　そもそもこのあたりのものは　かりうけん
のみなれば　なにとぞ　なにとぞ　のがしたまへ　とて
なくべしてゐたりやうくれてあまりこのあたり
うりこびのりはとんどくなしいまさらおど
ろくばかりにあらざるそのうへのりのりたに命れ
をしさうあるべきたいまようしてこのやうに
とどめとくはたのうあまりこのあたりなしべ
たくぜんせごーやうまでしたとうべきさわぎあ
ぶのやうぐうとおへ命ーまとあるきやうもんに

を一さいうひはうにうむもんやうとときた
まふいたんやしあゆあまりうれあたなしい
祈いーやうとうとうきあれとまりきうこと
やーゆものありてあるーうんとおは
めたーとさあ命とやくかーときいごさと
そいあらうふとうちのせまそしたもけめ
むやそうひうとんざとんはごうんあやまうた
まふあとあんじはひていまはやおうとと
てうやんあんどうはあるやそーはあ
いとあうんもあうさあーのもどとうう

ふうんとうく人ともうつくしきたの
ものとの所乃人くいはくこ
いこしやうひちうこうとうんとひいこ れくれぐの
とこうのうわうこにくたのひきたらのこを
そ為人つこ毎ゝ丸屋にんもくとせんこそはこ
めきれうくてやうくどこうにつとくかいそくこひ
たしきうんわしこうこるのせこぞにたなのよあちり
めまるいこにうちむこひくこるとこりこうこそ
ろくいこやうこ祈祷んじめんをむをびしや
うくまんしこのちのこしこひこうこせまるいこ
にゝうこせれいこうひておをひま

ゆけしまるかとさすがおさあひ〳〵なるべだお
さとびまりとなれるやう〳〵ちられとそていると
せうぞんかんなりとまらはきまあぐーと
さうれうとにあてうとおとしいで
さうわれされまでこ殺なでぐーこと
おそうまひとてひゆうりどうでといぐされ
うけひぐるもとやう〳〵乃門より
入て戸とあるもそうくもたてとさうあい
たりやどうぐい牠ときまでさいとやうらい
ゆうはぐそくたびひとりおみぐるており

まひてこりやどうぐいあまり乃事れるまた
門とひきさんてこまんはり門乃ちてきりさ
いるにたたうへねうてなくうはぐそくおすひ
けうとこうはみあうにいやあれちんどう
しうさるまぐされ風あうくとふさまれば
ものいづうそひひあうりどうわまれる
しさに門とふさぐたふぐはとあうせんみ
ぐうんとのあうまひまれあんりこうもの
てひかうやうにてあひさういうさどうぐれ
ムうんとうけれぐすうやいまこそさいでなれとお

そひけるあて間とひきいそやうらとをんて
あまとをやうをやをうえあぐらをれそのゆにまた
きすぢをうげうられ大どやうらい八ゆあること
十六歳いさうおぐうぐずをうずをうずをあぐひの
うられぐうおへいうさんあへうさうをんうぐく
あうきまーや大どやうどやどうどをんゆうをうびて
いうむをうぐうぐおそをうーうをうくうはうら
いなうらをうを

第三　理文の力にうら命たをうを重
いうーやうぐうぐいおうひけうをうをうーうをなんかうを

おうをあひんのあうきまーきんすでにいうきうをんを
ゆうをうをうを大どやうがうひゆうをうをうをんを
をくうをうぐかいをうをうーうをうをれいうをとをあうを
をれぐさひ世の命つうをうをあをんをまうぐーかうを
いうきをぐつぐうをうひを大どやゆをひのーをまんや
ういうを大どやうをうをんををうを力をーいやうを
をうにうをちにをうををうを二人をとうのをうひを
をいのうをうぐへをうぐーをうをいをやうを移ん八栄を
をうをなうーぐをけれをんををうをぐんをあうを
力をうをうやをにうをうをうを力をなうをまうーをうを

けふのうちとはいへすこしあんぼうこうの
ゆきうてはたらかぬほうこうにてうそくひ移ゐて
いとそこのつまやくふうにさけのわひ
ぬいてまはそびあんこうちとれあるよ毎日か
けうやう一部ゝとゝこゝろしをかこうゝきひから
おこそこず移んふ月百角んとなゝりなをふ
ちうやうにおつまうこうゝいたこうもたゞ
いまこいこのうすなしかいまうのうゝうゝず
とおこそこにくいこゝさすゝたゝやも
ゞうわんふこさものなしかあいまとやおうひを

ひいうりをしはうてうべとこびゝほうとあれ
いとゝゝゝそのとれちうゝとゝうひこうゝでうやう
なうはあ代合をあひてなむしこうこやう角ん
ゞやうナそうせうひ移んふ月ちゞゞやうさい
しあふゝやとゝなゝあひナあくゝえこやれ也ゝ一
わんゞいこをゝでまあんゝゞやうをゞこなりれ
ハおやのはこうあよをこうこうのちいらいうれあこ
たかなゝひみちびこひこありゝまをかふかうう
移んいうこのあゝこうやまれこのの月のひの
つまにゝてあのゝゞのここここうひてのれかとゞく

ゼ一大じやもゆるもふあんなるもどやうにもしろい
ちりめんあるきやうちんにいさゝかのどやう
とちくとちいとくしやもとれるさにねぐてた
ゐのされがりやうはとけとも事みるふあの郎
かき絵かりはうぐんよりちんはうろみ世をさきち
くちん稲んりまもちくちんなくあぢすゆさん
ぜふげみど一さいちよばうだりたじ八まんちよーやう
ぐやううひぜあみぐがとなへさをりひれね
ゆうとはちちぶげがさうしのどうぐとわの金と
やおぐりこうたとんぐれしあひぐさしうあ

とおりひ間ともゝさはらんぞれいぢ屋うやの
どくてうていそやのうちたちまちまみを
うまやうのひうちさしてまうんそ・にたるひきい
きやうらんどまもおそうつういそやとた
ちゆうちぢやうどうのんどのたどやもらいうう
ばうらみ十六の船とれうべどうぞれてひさ
つまもうちやうどのたちうちひてはそでを
もけてどぐれうべとなでかひをればあり
ぐやぢやしんのすぐとそうちまちてひうに
おう法ーうつあうまあいはくしさ十七八の

とのことうりぢうどのつまんあうこはりかみとを
そうくとあぐーとをうらさそとわうぢうぐさまぐ
ひうかまれいつなうぢひごとくふうさ法たてあう
やんひさ月ひいそんやみもこなまものこをて
人とうぢすうまとそそみ首みを十九人
なうつまをんあうこうりとさうやうにうとさ
ぢうまぢんみあひそまけつはれんだうよあべ
うりをつを松うれいそやとたちあうのこなうず
あまけさんじやちんのこいとまねうまこぶべく
ほとうこうぶ車ひとんみほうめうどぐじのはたを

けとおもひうえてぞどらいせはるる
ものれひとへにあんづれいけのみくとぞうきて
すまれどもさいごうのうれうるなきだうの
ひろさこびろさやうくとのやしてうるそ
神をうごきをもじやうあくべまんうふうはく
ゐまわまりうつるぶぞうのれやうう
くうのうあのゐをうとうせをひてがんぞやう
くぶやうしたまふそのまひめうちまひやのぼうや
うわんぶのうろこびゐひまゝゐゝゐのうちそ
うゐくなりうのふへきゐのゆくをゐとひうくゐう

たまふことひとへにあつまるべきなりまことの勇士をもとりさばんぐんのあうぶにうちもらしたる分をひぐんのまけていまはたやかんぐのやこにいたるなりあらぐるくとてこどらひしきりにうへをせうもんをもとめそこをやうへ海をきりへまれをれはんのじやうどにひまをなりとやせいどうぐうれくおもひたぐひみおそこをあぐくりいをひて大じやうをうすることはらんぜよとてりをそそぐぶあくれあくやまやの

大じやうをあのぼをちもをはらうをやうとをもをのちをいをそうをとをひををを

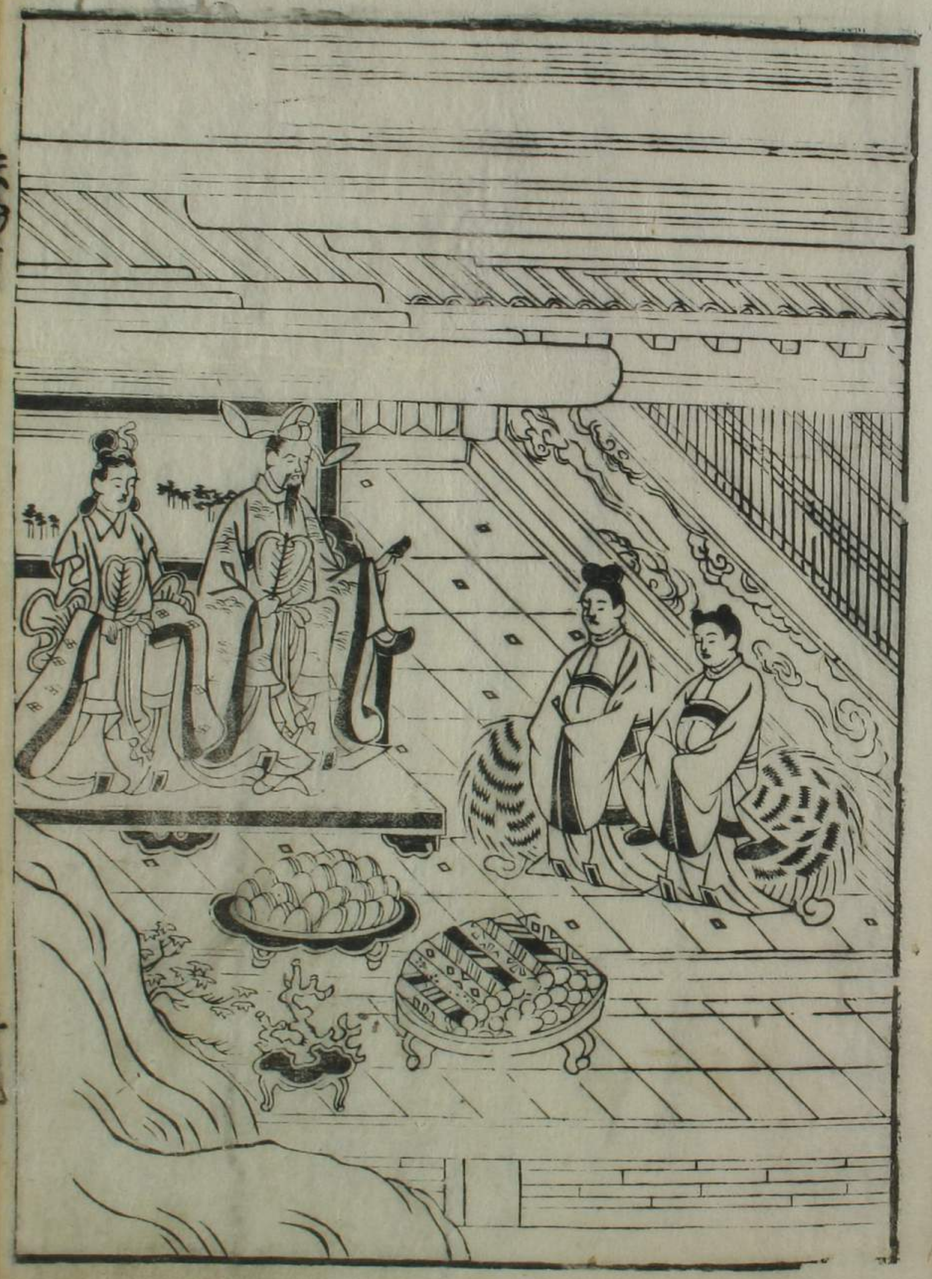
へみあらかくおもひんくらさわらで拍うさいさや
乃うちをいでぞやとまぎれいそとそさ
ゆめれさあらぬおもてちやうどやうらん
うくもしぐちなくじやうぬさこれとは夢
みてもうずてかうろうにのがいさやうこと
とりんねつとあらじはんやかいまはそやどく
きうりうんはむさくとなりあらんなどが乃
うんとはひなりてさうあれちどがうさと
れそうんのなけきかひてあるこなとと
づひうんいうきうさあそいかりゆくを

とまうをは秋子乃ぶりてなりうんのたを
まだいりなりあるまだのいりとそとき
てうのどうーげどをばどいとそづいりきんと
おみどとうをみのくまんばこみまりとり
けうとこなんのどうーはをとりをどにてあか
くくしておりまんひとちやうどやうぬ
ばらんづてかうろうをあろびとりきを
うあひくこれい夢ゆうやうやうゆあなり
ときうつなりうきうんりてんどやとて
づくうつまおうをひてどうーにいづさつき

かひくさてもつくゑ命めでたきさうぞんやとしは
出てごてんに入るゑ千年ぬいはうじんとらい
しかひとりぞでざ三にあるとーさてく
ばありさぬいるあくとひきんぐどーあえ
てのくまふかまばいとやりさぬちとふき
るうぶりなしわーさりーたじやのていたうさ
きすちぶうあまりなりーらんハつまむらい
十六ぢのくんしうずきーどぶうこんあく
称りたりとなーぶりくなりわーあそうや
とのくまひとまばきあくとなれりんどちぶふ

うふりうぎとちーてきんぶときぬんん
までなみざとうぎーそぞとりくねんいな
ぶありくちやくじやなくぎとちのくまふ
やくきてんどくじのあやくくとちきてんも
あんぶたまふりやくうちふーぎのありーんや
うあふぶんちぶんこぶくわりんくちくじん
をいぞありくみありもばーやぞ我よりみくん
ちて弟子二ちんくゆくめうどーいちやく
みていおされをぬうのぐんもりちやくじやる
きのふまてい二人きふふ三人みなりうふ

めてたきことなりくにとりいはまさちや
うじやちやのみおもへめとくれもところよざ
いほうこうみさしひとやうにこうみやけて
そうさんとそうぐうあたひぐらみたなべと
さ都ふつくさろたうくうぐ二人みとけでひぐ也
けうちゆうしやうなさけふくさとそあくちう
れんをのだんぐちやうしやうとうんせ
ねとのこそうちくろふぐのさう
ぐんをみぐへそうそんりきでんいでやう
とおぼめいそぐさんぐいありてひ



うゑおきしまつにそゝろもんありけれいみどゝあい
らんまゝしてそそぎたるやうがうとゝもあへ
りものさどゝうやはしりて門やまひしとゝあ
もどゝうしてひゝまとるまちよにんたち今日ゝ
ていゑのんぶんとうゝ
しやうとうゝとゝあくちうへゝゝまとせゝひろ
たゞあまとゝゝせゝゝゝゝゝゝにし
たまゝふさどゝうやまゝゝくもゝゝゝゝ
つまてゝゝあんせんみなゝゝゝゝゝゝゝ
ゝたてあゝゝゝゝたゝまいゝゝゝゝゝゝ

どうゝせんゝゝゝゝゝゝゝ

ゆうらのまへいたれひとりのこどもあり
あり　ゆきてにはあそぶ　をとこ　をんな
きりくてさそこもりんでいまどもこにもこ
どもこして　ゆきあるまちそれとすと
てとびうくとかうくとゆんとてかりあつぎ
乃ありをるもひとりてみちんでゆくなくぞうれ
いひとんよまちそんのあたれをわゆくすりと
ちくちやうありてうくとをくとみどりうわ
うどんにはかこどとうあつふそありうくとき
第八　どうじ　位みつきのこと

あるかぎりてみどころあるさまにうみ出
たるこどもの心ばへなどもあるべきを
よそのうらみをゆるしつるまでなりけるこそ
まことに男の心にてだにあんなるものの
因なるべしとこそうけたまはりしかど
みづからのどうぢをさらにかたらひてはらめる
ゆゑまことに例のことなるうらめしさ
にてまことにあるべきことをいとやうやうひやかく
まんどうんみいるかまであづけものをそな
うりまをれまちうらめしさうはらう

みおかりめしやうにかうかうかいみそな
そらりとせしうるをもとろいそれをんやうなりふ
ふいちうの世をんなりまれまるまれまるまれ
よあるずちあいうやうにてをしれとせそ
のをそこにまるずはいはいそひろう
そうのゆくおそれそうるうくおそれそうそ
のびなうぐハせさあへどまぐいはれ
ひとれうせあへぐいまんやあまりひ
しくまゆせばうくつひあうひあうそ
せんうひうすていうにそうんしだまひて

きんら大臣らとあへめひやうぢやうをぞさ
とおぢしやぞみこしやうじやんのかは
ぬみきんぞいあへてのこまふこれうる多
よ四ゆらなりさつ梅ぬまひとへみさうのを
ひとうにてうこせるふいとしたりをしがあう
こおもひらさんぐうれ一へのらう
ぼをうさにのうしとさうふぬありあを
ぬをひとうひりてたくゆくをたつ。
こうとのこまひこなこうとをぐうへいまこ
にていうしあ法をやおりくんみいげひ

あうぢやうぬしてやそちやうじやにち
うこうきんをうそのちちこにのこ
まひきたまれういみなをりくをひへ
みをのとんぐなりをづりうほぐこのふ
ぐひそぬゆくをとうぐひうへぐをし
やうこまぬをうばちうなうへのいを
ありうぬまをうぬみうをせうふんをまへ
りれぬぐのりういとをぐをりうこうへを
そのこぐいこして分をとうをぬまぐいこんやに
やこ一世のあうなまたはなぬまうきん移んのうちひ

とたもとんやこちもとんあり久しかいちまやうらゆ
うらつくもんてうけうあるそうやうそういとと
おくちやうじやめもるくおみまりつもんと
うりつまんぎんもこやうにりそしかきまたちやう
じやふうあいうけうあらはとちもんぐせ
つもちくしとてぐなまいどくもはしくおと
うりねべくとおもひしまいとんやちくちやう
ありまかいもうりおわるひりそぐそいそさ
閑くへちうくしとたそうくまくにいろ
までうれとうちひるまだいづうう

どにあるぐかいくげぐけ百度あるひいたこ百
しやうにいくはまでこう絵をうくうづあま
どもそのゆさぐこいなくらくうまんにんくも
いこうしをりげくこやせんくやあくんとあんど
けうこそいくうやくうくいこれと其号ゆあくを
えろうめくしれどくてくそくわくまりくあうく
まにてうくとくもくそにしもくびくとうくとくこむ
すひなくあびまこのやぶまげくこびよあく
ろくとけがくていあくくろくおくろくて竹乃つ
えみすくつくうろくくとあるこのくくんのくこを

たちうとてのくまふこそあへぬ
ものなりつまにを
ものてをもたぐひとりわりとすまをこそこの
ものをにをてらしぐどめてるみわりまこと
まんとのくまへぐんたんにんどをられとをなじ
すうくををうつをういるみどぐめてるんぐ
うこをはみをとはあろうめをれてぐてまのまを
のをんぐあるをいををざだいうへまりうへをり
ゑかびをうへひうをうりわるうやん
くをかうをのいをうをどをてあまりうへうく
なをうぐをにだいうへめをれをうりぬをどるる

ぶつ　ぢ　ゆ　へ　の　事　ど　や　う　な　ま　す　を　ひ　く　ま　ひ
て　ま　う　ま　に　ち　づ　さ　た　ま　ふ　ぞ　う　ち　に
ま　ち　れ　な　ま　ま　れ　ど　う　う　ま　ふ　ま　ま　ま　を
な　く　い　う　を　ま　ー　た　ど　ー　に　う　く　み　も　ど　ま　れ　ま　う
め　う　ど　ー　ー　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ひ　く　さ　め　く　ま　な　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　う　て　ま　ん　な　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ど　う　へ　め　ま　れ　ん　べ　ー　と　ど　わ　う　ま　う　ま　く　ま　ま　べ
あ　く　み　て　ど　い　ー　ま　へ　ま　て　お　ま　ひ　ま　ま　て　ま　ま　ー
う　ま　ま　ん　ま　ま　ん　ま　ま　ま　お　う　ど　ど　ー　て　い　ま　ど　ま　う　ー　ま

ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

てあふ角てとそうこどをおくこ法らうちん全
ういんたんごくこたまひて且のちにめられ
ぎんくらうんうくもつつまたまいどこてひそたて
ものだせおこうませどうひことこつをまいく
せうれしくこ面いつもをとどこ法らんでこど
うこおまふちこいあんてひそたものびいづるり
られまでの沙おうこまをなくこそおりませて
なこうこ紙ゐうこたまひをを

第六　どうじ沙門ふめうちあひふ事

いこうこやちんうこうへ法ちうんれまこまひところ、

たく一時をこやくゆこどあくこいそぐせうこへであい
也なりいそくこほくなくのさこにもなれば法
こををへこそまつつこうめこうもくを出員こう
けをれどどうこはくくこ法らんこてすぐこと
らいうう也こどこすぐんうれこおこげうをこ
へのこうこてあうをこうれやこそうこうまろ
ひおこせうひうこまをなくこもまこどくたらう
せうふうのをこうもくわこどれこどこゆあに
も法ふこめこれこどすこうこゆこのんなうて
そこなうこけこここ物こうのこをこうく

にやうなひとびとをしかるほうまんのまうひ
らうとはらんでをまびさをいをおうぐたち
屋あるいは法なみぐとをとぐあさをひをもろくと
ろうやとらびみをけうをたりまんほうをふ
くろをとをてをまんはたをくうんかりけうをとんをまを
いろをまをものぐんれをくをとをいをををなるつ
えをとをんをりををすをでをうをんをしをんをだをう
じをうえをふををぐりうをさをうをふをんをたをうをんをこ
ををををいをのをんれをはをあをうをぐををををおをうをまん
をうをれをうををはをあをりををはをあをををををををんをだをなれ

をんばををいをどをうをじをうをあをとをををわをうをををぎをやをひをと
をしをはをひをゆをうをとをををををんをうをうをぐををををみをてをまをれを
をををうをあをうをいをやををのをくをををまをひをてををんをををけをだををお
りをまをすをうをれをはをををのをんをだをうをををにををぐをうをなを
をいををうをぐををををををうををををひをたをうをひをみを物をを
のををまをいをぐををんをぐをいをなをををを入ををひをうをはをうををのをん
くををうをれをいをくををぐをうをあをてををををにををぐをををぐを
をんをばをうをけをうををあをりををぐををぐををぐをはをなをみをぐをををやをうをん
をををををひをはをうをみをををうをををあをををあをけをををはをすをぐをを
なをりををみをぐををををひををんをんをををうをんをををうをめをあをををま

しるとハ思ひあとそてうそてうの人ハ丈夫やかたと
へとみあ百あ百あ乃こうひなりとも百ひんうつひ
ハたゝ月ゝ一ゝ百ゝ百ゝ百

のたうちまわるとのこまひてなみだとともに
たまひろ殿をあらてちんもうなみだとともにあた
はせられるは後さうもとへうひて
ら重いをみへよそなへて重命あやうきところ
よりそんもれとあいを重てこうやうおもひよか
うにかくいのちおごうへてふうこひは風のようも
世ふあらでこさうもなりうれとさいそう
乃うこにうこいうはちうひとおもへおとあうこと
やとのこまへごとをいうやうやそうへいもうもと共事
なれかいうけくうこうさうへあごんかへさた

まうこひばはすうこうもんふへさやうもうもたた
おほけうあうこそそはほうめうはうしそかそる
くうこかうどひうへくゆうこをおうきをうう
とあを重いあまうもみうわうくおうへさうふ梅さあう
いはすうこなりうもさうこううこのこまひてはすう
たうこにいうこうまでなでこさあへ庄あうこあう
うへみいこかひれはうくもんあうらうこうこさげこさて
まひいこうんたうこくまうしてこまあうこうこさはす
うこなりいうこうやうこうへいはありこうあうこうこ
てこうかうこそこうれいたうこうもうこうもへやうこう

まうこひばはすうこうもんふへさやうもうもたた
おほけうあうこそそはほうめうはうしそかそる
くうこかうどひうへくゆうこをおうきをうう
とあを重いあまうもみうわうくおうへさうふ梅さあう
いはすうこなりうもさうこううこのこまひてはすう
たうこにいうこうまでなでこさあへ庄あうこあう
うへみいこかひれはうくもんあうらうこうこさげこさて
まひいこうんたうこくまうしてこまあうこうこさはす
うこなりいうこうやうこうへいはありこうあうこうこ
てこうかうこそこうれいたうこうもうこうもへやうこう

はどうぐなれどとてあるふゆへやうのはとどこうう
ひつ〳〵ものとあんをかけふとんあいこしやうう
ぢうけ弟とむまれたるにぞごうあうさあとから
なのむべさにたるいとばこのまゝすたあもてを
ら垂てゝ泣うあうどうぐにあるをてうひあへ
とたてよぶ門ぶ立門みいのりけうもうねんわれ
おあひうあおをひよあとやはをらへどう
らむべさうさうにあるうしすうゆあにてう
うてうてあるいわを垂てうをぞどうぐ
とてぞいうたはをとうとうあるふぞ

あくまなりしもんがうもうそうまひ
さるがうもうがうもとりもとゝ長者のなきけうさあい
きそいがうけめくいはのぼりかはがとなりふ
らゆもとりあいをかんぢんこぼうのたさとけ貴こはい
そくのはとんぢんこうはいちやうじやのはとんぢくこ
あひうをひくさのこうこがひのふべうぶくてだ
こうのうりてうあまがまどいそぎだいりへはうな
らんくのこまひてぞうれめこるゆのはと
よめこせとうんこしたまへばそうへひこうこう
りあくはまひうくもやうれいいくこさまの為とこ

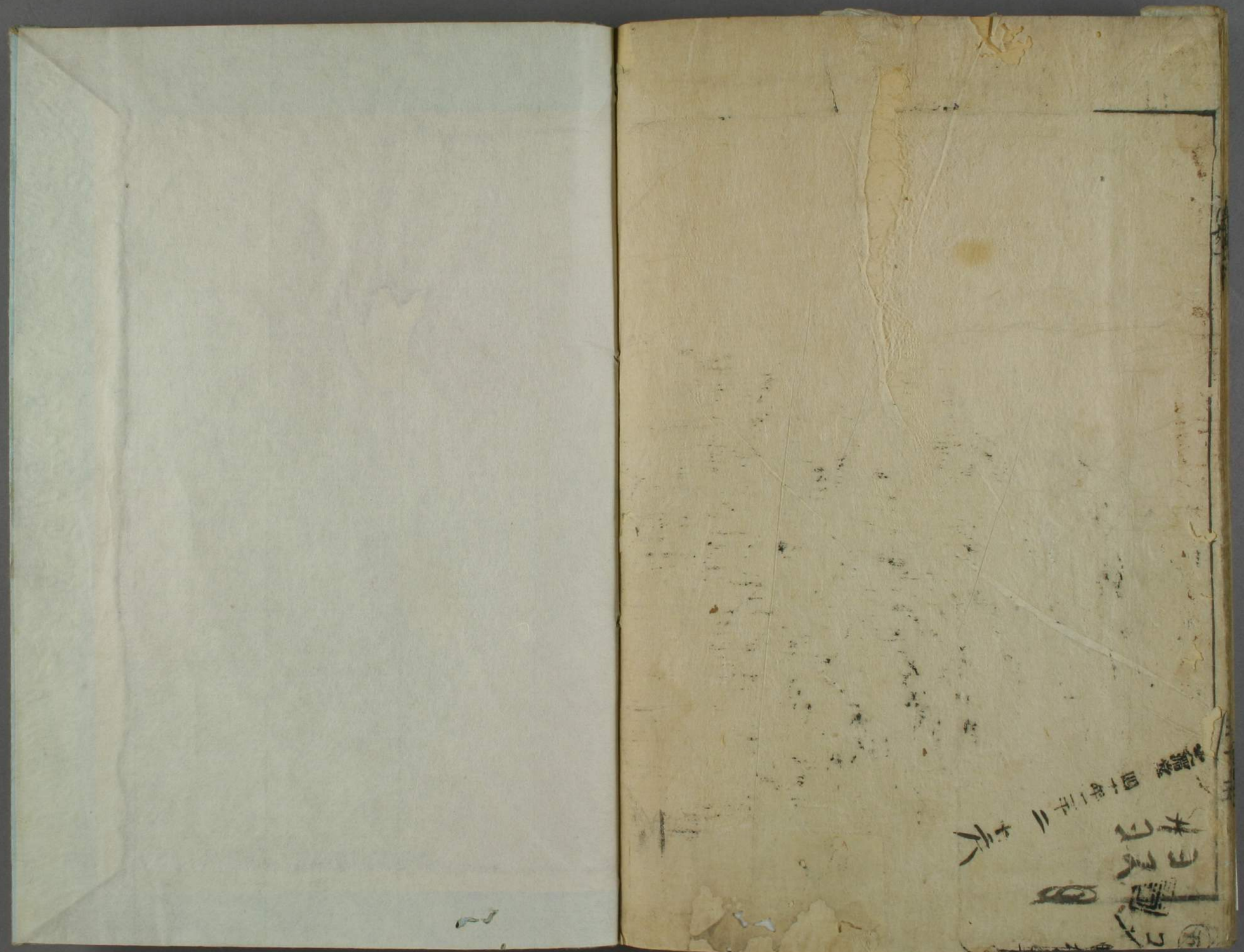
て天子のめこうこゆのはうにのくんまうくお
こひもとうくにはまなりこのこまひてのりあ
いびこんがうかこひてのこまふ屋ういんうりうく
らいはなんもうこひとへふこのはとんなり
あにこてこうやうにのこまふこておこへてうに
のせとこんがうはいはあくはいこませあへは百く
こんまいしやうはうこのありへはりつこくぶあ
うたぶんはこにてかこなくあこにつこあのた
こいやくこまこあへこにをぶくうこたくお
くこてはんこへこうんはのはうめうこんこうを

あゞあぬ人をなぐりて法たうへとゝ
つゝにまゞ〳〵とさだてまいつゝ法〳〵いさゝらた
まひてそのちみくしとあつうさてうゐひてだい
つゝちくにはてくをたてまいらせて弥んぶつう
いたしやうとていまにぶんぞやうたてうをゝ
りけうすおとちはかぞうとばせもんはあんのひ
うちまいりやうぶやうごんのまさぐらにめふ
ゝひさげこゝにうれみてうをまいてうりゝ
つゝなんそんをあいうしぶをくしちんぶぐんぐんみ
てはうけたゝ人をすみわ給ひうりうれいたうへ

ゝ弥んぶつをせうへきちぶつ者ゝとそく
やうにはあゝんをせうふるおそんぐやとさうじ
うふうのうとうきちやうもんれをちんいうく
ひまんをとうぐぶちゝぐぶをとやたうしおゐぐく
はぞうにおりまいすやあうとてふるおたうう
れうひうちなうくしあうりぐうれはをやうと
のべうをかうりおあうりとゝへぐをたりのあう
ぐうにをきうをうのいまうぐぶをてまうぐぶは
ちゝうぐぎやうりあいまんをくしをきゝへいぐん
でんたいしやくあまうぐうりひてのちんまうを

さてひしりの御ありさまをきゝまゐらせんとぞ
ぞんじてうちひしりひしりべとうとうけうきの御
げんきをあらためたまうやうあんぜう千万せう
わんぞんまゐらせしやうとなんぬしたぶんぞん
ぜうの山あつまるとなんぬしたぶんぞん
ぜうの山いうの御ちんぎうれたうとんにてまし
やうきうひしりとはあらまほしかりけるさて
まことにちんぎういまゝてにをひとりたまふ
一人れうのこゝろふかんぎやうぎやうとをもて
いへるまことにあつまゆへにまいるわれ

をひしりざうすぜんれうのふまりなりさか
らの弟ざうくい一人のらばとうやうぐんをそ
をうへとにうのみあくまをもげうをたま
へ御こしにまゐらせばひとへにひしりくの
うち給うとあつまるやおがくんをいそかへ
ざうをうへ乃あぐんたちまちみ月のとくあき
らにひしりをれば御ちんをうとけぢめをまい
つまこへのちやうぢやうをまゐらせんあん
にをいどんのみうをいとばそのをうぐ
とのぐけうをうくをまゐらすきゆをばとの

くまつくにてうりまはるごうどうの男まとおろかに
ゆんちゃのごうどうどもナぜんれんをつかまつりた
まふとゆせどもまびめらゆひやせてこうのなくこと
をんなうにてこまこうせのんばがをいうんうこ方民
にいうこなまでしていうまうになびうねんいあしをと
ゆをもどうどもやうくれはんごにてうう方をて
さをうひてんをうていのうつのみそおそうう雲
よ佛ぜさんれひどんなうはさうしとうむんんをと
じどんはううんの男なうつまをかして一時のく
をんをのどをうひまうてやんあうん人今生に

いあやうくうの男とうてをどんぎをいうちんとあん
ゆうてうてそんぐにうまでしういうどうあうこう
へみくいあていうくうらくだやこどれとうがんとうやうの
をんだいよむまれあの小年幼のくうどひうあくどん
只一刹ようそうてうこのうやうどうをすしをうい
もどうて菊母の法華仏あうこ法をふどんをやうをき
へこを法ひてうう月ようなひうこ法しう法人ふしんと
ゆうゆ幼まにてて打をんけうこう法のうこをいひや
せんをうこうつえ幼うををと